イワン・キリエーエフスキーによる西欧近代化の反思（中）

「ヨーロッパ文明の性格とそのロシア文明との関係（E.E.コマロフスキー伯爵あての手紙）」試訳

Reflection on the Western Modernization by Ivan Kireevsky (part 2)

Translation of 'The character of European civilization and its relation to Russian civilization'

福島　仁
Hitoshi FUKUSHIMA

はしがき

ロシア思想の研究は立場の違いを越えて十月革命を帰着点として構想されていた。ソビエト連邦ではかつて、チェルヌィシェフスキーやゲルツェンを「革命的民主主義者」と呼んでレーニン主義の先駆けとしてロシア革命思想の潮流を遡った。これはレーニン自身の評価を根拠にしていて、ゲルツェンがマルクスの論敵だったこと、ボリシェビキの敵対者だったナロードニキの思想の源流となったことが大きな障害とはならなかった。他方、社会主義体制に対抗する立場の人々は、十月革命をロシアの哲学と歴史における大破局と考えて、破局をもたらした害毒の元を探し求め毒の成分を分析した。同時に、古代から受け継がれてきた「ロシアの魂」を革命に対置し、破局にもかかわらずそれが主流であって、外来のマルクス・レーニン主義とは相容れないと主張した。現実政治で失った支配的地位を精神的に回復しようとする努力が現れたのかもしれない。主に19世紀を対象とする優れた研究が十

月革命後に亡命したり、追放されたりした体制と共存できない貴族出身者や聖職者の手でなされ、またウクライナやラトビアといったロシア帝国の周縁の出身者によるのは偶然ではないだろう。しかしながらどちらも一貫した基準をもつ思想体系に従い終局の目的が設定されていることでは似ている。歴史の各局面で当事者が個性に基づき状況に応じて選択を重ね、あたかも偶然に事態が生起したかのように歴史が曲がり角を進むとする歴史観から、当事者でない者が観察してみるとどちらも納得できないように思われる。ロシア革命が十月の一瞬で決着したわけではない。ソビエト連邦の70年こそがロシア革命の始まりと終わりである。また一方、70年間でロシアの伝統思想が断裂している訳でもないことは今にいたってはっきりしつつある。マルクスはドイツ人であってもロシアの国土と人々の中に共鳴する何かがなければ短いとはいえ70年の歴史を重ねることはできなかっただろう。また、70年後にロシアの伝統思想が「旧制度全体が「ひっくりかえった」時代には、この旧制度のなかで教育され、この制度の原理、習慣、伝統、信仰を母乳とともに吸いこんだ大衆が、「整いかけている」新しい制度がどのようなものであるか、どのような社会的勢力が、まさにどのようにこの制度を「整えようとしている」か、どのような社会勢力が「急変」の時代にはつきものの無数の、とくにはげしい不幸からすくいだす能力をもっているか、ということを見ないし、また見ることのできない時代には」(『レーニン全集』第17巻、38頁）現れるイデオロギーとして再登場し、不死の生命力を示した。ロシアの歴史と社会に何らかの「根源」を持っているからこそ生命は持続するのであろう。それはまたマルクス・レーニン主義についても言えることであろう。

ロシアの西欧化が劇的に進んだのはピョートル大帝の改革を経てからであり、ヴォルテールに先んじて、西欧文明の価値を理解し、実際に政策として導入を図った。彼の洞察力は並外れていた

からヴォルテールは大帝を評価して彼の伝記を著している。著者キリエーエフスキーも大帝の事業を一部肯定的にとらえている。石造りの都を創り、ロシア人の髭を切り落とし西欧の服装をまとい、西欧に倣い海軍を創設し、アカデミーと大学を創り、行政や貴族制度を改めた。明治維新となんと近似することであろうか。そして同じことが数限りなく繰り返される。ちなみに植民地となった地域でも石造りの教会が作られ、ヨーロッパ風の町ができ、ヨーロッパ人の統治が進められて外観は変わらないが、内面は当然全く異なるはずである。しかし、その都市を中核として流出した西欧文明の効果は驚くほど同型である。衣食や娯楽などという風俗、習慣まで西欧はいはば祖型として「自身の姿に型どって世界を創造」してしまった。新たな世界が創造され生まれたならそれは現代世界にとって運命となった。たとえて言えば、鉄道を爆走する蒸気機関車に引かれる列車に平行して走る馬や馬車から、あるいは自分で走りながら乗り移る、つまり伝統的社会に生きている人間が進路の「転換」を実行する事はこの数百年の運命となった。ところが、列車に飛び乗った一人一人が降車した駅はみな違っていた。イギリスやフランスやドイツであってもいまそこに現出している社会と国家の体制は相当の違いが見られる。ロシアや中国、日本やその他の国ならなおさらのことである。伝統社会すなわち「根源」の刻印がそこには明瞭に見て取れるだろう。著者、キリエーエフスキーが考えているのはこの「転換」と「根源」の話なのだ。

テキスト

訳出したのは

И.В. Киреевский, ‘О характере просвещения Европы и о его отношении к просвешению России (Письмо к графу Е. Е.Комаровскому)’

である。
翻訳に使用したのは
И.В. Киреевский ; [составление, вступительная статья и комментарии В.А. Котельникова], Избранные статьи, "Современник", 1984, C.199-238, C.357-359.
である。そのほか注釈を利用する目的で
Иван Киреевский, Духовные основы русской жизни, Институт русской цивилизации, 2007, C.149-228, C.398-414.
を参照した。このあとの記述は多くこの注釈に依拠している（C.398-399）。

この論文ははじめに示されたようにエゴール・エヴグラフォヴィチ・コマロフスキー伯爵（1802-1875）との会話をきっかけとし、返答の手紙として書かれている。しかし、内容は論文であるので、冒頭をのぞいて論文体で訳した。コマロフスキーはキリエーエフスキーの親密な友人だった。1852年に『モスコフスキー・スボールニク』第１巻の先頭に発表された。『モスコフスキー・スボールニク』は著名な出版者であるアレクサンドル・コーシェレフ（1806－1883）により創刊され、モスクワのスラブ主義者にとって最初の独立した機関誌の性格をもっていた。コーシェレフは子供時代からキリエーエフスキーとは知りあいであり、のちにウラヂーミル・オドーエフスキー侯爵を中心とした「オープシェストヴァ　リュボムードリヤ」（哲学の会）にともに参加していたから、密接な思想上の協力者であった。このような著作の性質上、スラブ主義宣言という意味合いをもつと考えてもよいだろう。

「ヨーロッパ文明の性格とそのロシア文明との関係（E.E.コマロフスキー伯爵あての手紙）」

（承前）
なぜなら実際のところ、何らかの現実離れした思想家が煙の充満

した自分の部屋から彼の独断で歴史を操ることができたからではなく、それ自体の秩序に沿って進行する歴史が自己意識にまで発展するからである。彼はただ支配的な結末の総和に注目し、それを一つの一般的結論に総括しているだけであり、そして彼の思想の動きの中のすべての独断がその思想から現実面でのあらゆる力を奪い去る。なぜなら歴史の秩序だけが優勢になり、秩序自身が優勢であることからその信念へと必然的帰結になるからである。かくして、民衆の組織では、彼ら自身の信念が自分たちだけの見方だけに基づいているのであるが、哲学者の頭脳は普通の不可欠な器官となり、それを通じて外部の出来事から内的意識にまで高まり、また内的意識から再び目立った歴史的活動の領域へと回帰してゆくあらゆる生命力の循環が起こる。従って次のように言える。西欧の思想家は論理的理性の一面性がわかっているのではなく、自身の進歩の最高段階に到達したことによって、ヨーロッパの論理的理性自体が自己の有限性という認識に至り、そして、本来の活動の法則を理解したために、次のことを確信したのである。自己運動する力の範囲は人間の知識の否定の面までにはそれ以上広がらない、ということ。論理的理性の導出的概念の抽象的結びつきが認識の別の根源から引き出された基礎を必要とすること。弁証法の法則に対立するのではないし、そこから逸脱するのでもないし、そのはたらきに達してさえいないのだけれども、知性が人間の魂のほかの力のすべてのはたらきの本来的な総和から切り離された時には知性の最高の真理、その鋭い視力、その根本にある信念、すべては弁証法的過程の抽象的サイクルの外にあるということである。

こうして西欧人は自分の抽象的理性のまれにみる進歩により単一の抽象的理性に基礎を置かないすべての信念にたいする信頼を失ったので、この理性の進歩の結果として、その全能についての自身の最後の信頼さえも失った。それ故、西欧人は肉欲的関心と

商売の利益を越えたあらゆることへのなかばだらしない無関心状態に満足せざるをえなかったか（多くの者がそのように行った。また多くの者がそうできなかった。なぜなら過去のヨーロッパの生活のまだ保存されていた名残による違った方向へ発展があったからである）、あるいは最終的な抽象的理性の進歩に先立ち西方に活気を与えた排除された信念に再び回帰しなければならなかった。――一部の者はこのように実行した。そしてほかの者はできなかった。なぜならこの信念は西方ヨーロッパの歴史的進歩のうちに作られたときに、すでに抽象的理性の破壊的作用に貫かれており、それゆえ自らの原初的生活状態から、独自の充足と独立から、理性的秩序の段階へと移行し、そのためその最高で活気ある始まりとは違って、西欧人の意識には理性は一面的な姿で現れた。

では思考するヨーロッパにとってあとはなにをすればよかったのか。さらにもっと前に、西欧的な理性優先の信念にたいする影響に先立つこの根本的信念の初期の純正さに回帰すべきなのか。西欧の進歩の最初の始まりに先立って存在していたその始原へ回帰すべきなのか。これは西欧的教育のあらゆる誘惑と先入観に取り囲まれ満たされている識者にとってはほとんど不可能な課題であろう。おそらくそのために、ヨーロッパの思想家の大部分が狭く利己的で肉欲の目的や個人的な理由だけに制限された生活にも、知性的意識の十全にまさしく対立していて信念なしには全く存続しえない知性だけに偏った生活にも我慢できないし、明らかに偽りの信念を奉ずることもできないので、べつの出口へ戻っていった。つまり、自分の頭の中で全世界のため人生と真理の新たな総体的な原理を各人が考え出し始めた。個人的な遊びのなかで彼らの夢の構想を探し求め、新しいものを古いものに、不可能なことを可能なこととまぜあわせ、休むことなくまさしく無限の希望に身を捧げながらである。そして各人は他者に反対しながら、しかも各人は他者の完全な認知を求めていた。皆がコロンブスに

なろうとし、皆が頭の中で新たなアメリカを発見しに、不可能な望み、個人的な推測、厳密な三段論法による結論という果てしない海へもう一つの地球の半球を探しだそうと出発したのである。

このようなヨーロッパの知的状況は、ロシアでは後にヨーロッパで生じたのとは反対の影響があった。一部の者だけが、おそらくそれもほんの一瞬だけ、この非理性的な秩序のうわべの輝きに夢中になり、退廃の美のみせかけの上品さを誤解することがありえた。ところが大部分の人々は、ヨーロッパの西欧思想の出来事を注視していて、ヨーロッパの教養では不十分であると確信したので、ヨーロッパの識者には認められていなかった文明の特別な原理に関心を向けた。それはかつてはロシアもそれで生存していたし、今でもヨーロッパの影響に関わりなくロシアの中に確認される。

ちょうどそのとき活気ある歴史の研究、対照、出版が始まった。特に田舎の修道院や埃の中に忘れられていた文書館を公開し、かなり貴重な古文献を刊行した政府の活動がこの場合には有益だった。当時、ロシアの学者は150年へておそらく初めて公平で探求的な眼差しを自分自身と自らの祖国に向けた。そして祖国の中に新しい彼らにとっての学問生活の基礎的知識を研究しながら、不思議な現象に驚愕した。彼らが驚きから気がついたのは、ほとんどすべてのこと、ロシアに関すること、その歴史、民衆、信仰、文明の根源的基礎、昔のロシアの生活の中に、民衆の性格と智恵の中に残るはっきりとしたまだ暖かいこの文明の痕跡ーーこれらほとんどすべてのことを、私にいわせれば、彼らは今まで誤解してきたということである。誰かが意図的に彼らを欺こうとしたためではなく、西欧の教養への無条件的執着とロシアの野蛮にたいする無意識の偏見が彼らからロシアの理解を閉ざしたためである。おそらくは彼ら自身さえもかつては同じその偏見の影響の下にあり、その同じ誤解の拡大に力を貸してきたのだ。だが影

響がとても大きいので彼らから、最も明白な、言わば目の前にある事柄を隠した。それ故、覚醒が急速だったので自分でも意外な事として不思議な感じを持たせる。

我々は日常的に西欧思潮を共有している人々を見受けるし、彼らの中に特に教養を備えた知識人や特に強固な性格の人々を見受けることもまれではない。彼らは実際に自分の思想の形を変えてきた。それはただ公平に深く自分たちとその祖国に関心を向けたからなのである。そこからロシア的生活様式の特殊性が成立する根本的原理を祖国の中に理解しつつ、自分自身の中には西欧の知性の進歩の中では自らの居場所も糧も見いだせない本質的な魂の側面を見つけながらである。

とはいえ、ロシア的生活様式の特殊性がそこから成り立っているこの根本的原理を理解し表現することは、たぶんいくらか考えることほどは簡単ではない。ロシア文明の根本的原理はその生活の中で、西欧文明の原理がその歴史において発展したほどまでには、自明であるまでに明らかになったことがないからである。見つけるためには、探さねばならないが、それは西欧の教養が飛び込んできたようには自分で視界に飛び込んではこない。ヨーロッパは完全に自分の見解を表出している。こう言えるだろうが、19世紀にはヨーロッパは9世紀に始まったその進歩の過程を完了した。ロシアは歴史の活動の初期の時代においては西欧よりも教化が遅れたわけではないけれども、外部の、そしておそらく偶然の障害の結果、独自の文明の道への歩みを常に止められ、それゆえ現在のためにロシアは十分にすべてその表出されたものを保存できていず、いわばただ真の意味の片鱗だけを、ロシア人の智恵と生活の初期の原理と名残だけを保存し得た。

このロシア文明の原理は何にあるのか。西欧文明も生成してきた原理から特別な何かを提示しているのか。その今後の進歩は可能なのか。もし可能ならば、ロシアの知的活動にとって何が期待

されるのか。ヨーロッパの知的活動にとって何をもたらすのか。なぜならロシアとヨーロッパの相互の浸透が起こった後は、もうヨーロッパとの関係なしのロシアにおける知的活動の進歩は予想しえないし、ロシアとの関係なしのヨーロッパにおける知的活動の進歩も予想できないからである。

ロシア文明の原理はヨーロッパの諸国民の文明がそれで成立している構成要素からして全く異なる。もちろんヨーロッパ諸国民それぞれは何かしら特別な文化の性格を持っている。だがこの部分的な種族のそして国家的あるいは歴史的な特殊性は彼らがすべてともに、一個の全体の中の生き生きとした一員として特別な一部分それぞれが参加する霊魂の統一を形成する妨げにはならない。それ故、すべての歴史的偶然において彼らはいつも狭い好意的な互いの関係のなかで進歩してきた。ロシアは魂によってヨーロッパとは区別されたので、それとは独立した生活をおくった。イギリス人、フランス人、イタリア人、ドイツ人はヨーロッパ人であることを止めたことはないし、その上で常に自身の国民的特殊性を保っていた。それに対し、ロシア人には西欧の文化になじむためには自らの国民性をほとんど廃絶する必要があった。なぜなら外見も内面的な物の考え方も、お互いどうし明白であり助け合っていたのだが、ロシア人には全く異なる源泉から生じた全く異なる生活の帰結だったからである。

民族の違いの他にさらに三つの歴史的特殊性が西欧におけるすべての文明の進歩にきわだった性格を付与している。特殊な形式、それを通してヨーロッパへキリスト教が浸透した。特殊な外形、その中でヨーロッパへ古代古典世界の文化がもたらされた。そして最後に、特殊な構成要素、そこからヨーロッパに国家体制が創られた。

キリスト教はヨーロッパでは民衆の知的活動の核心であり、ロシアでも同じである。だが、西ヨーロッパへは唯一ローマ教会を

通して広まった。

もちろん、キリスト教世界の中のそれぞれの総主教管区、民族、国家は自分の個別の特殊性を、さらに全教会の完全な統一の一員でありつつ保ち続けた。それぞれの国民は地理的、民族的、あるいは歴史的な偶然に従い、独自に知的活動の何かの一面を主に発展させていたのだが、自然と自らの霊的生活でも、神学者の著作においても、まさにその特殊な性格、いわばその自然的特徴を啓発された至高の意識でもって維持せねばならないことになった。こうしてシリア諸国の神学の著作家は中心的関心を世俗と断絶した内面の瞑想的な人間生活に向けたようである。ローマの神学者は特に実際的活動と知識の論理的結びつきの側面を研究した。文化程度の高いビザンツの教会著述家はなによりキリスト教とその周囲で花開き、最初はキリスト教と敵対し、のちに服従した個別の学問との関係を考えたようである。アレキサンドリアの神学者は周りを哲学、神智学、グノーシス教の諸学派に囲まれて異教とユダヤ教との二面の戦いの中にあり、主にキリスト教学の思弁的側面に関心を向けた。様々な道が一つの完全な目的に通じていて、それに向かって進む間は完全なる目的から遠ざかることはなかった。どこでも個別の異端が生じるが、それらは常に異端の発生する民衆の支配的思潮と近い関係をもっていた。しかし、それらはすべての個別の教会を一つの聖なる一致に結びつけた世界教会の思想統一によって消滅した。時代が進み、道を外れる危険が総主教区全体を脅かす時もあれば、世界教会の教義と一致しない教義だが支配的思潮や個別の教会を作り上げた国民の知性の特殊性と調和した時もあった。しかしこの試練の時代、個々の教会にとり世界教会から分離するか、自分独自の考えを犠牲にするか、決定的な選択を控えていたときに、主は自らの教会を全正教世界の一致によってお救いになった。それぞれの個別の教会の特殊性が争いに行き着いた場合だけはその教会は伝説や他の教会と

の結びつきから離れてしまう可能性もあり得た。しかし、正しい共通の伝説と共通の愛の調和に留まり続け、各個の教会は霊的な活動の特殊な性格により、ただ全キリスト教の共通の富と霊的生活の豊富さを拡大した。こうしてローマ教会は自らの言わば正当な特殊性を保持し、とりわけ世界教会から離れていった。しかし、分離したので、自然と自分の個別の特殊性を唯一の形式に変えざるを得なくなり、それを通して単一のキリスト教の教義が、それに従属した民衆の智恵の中に浸透できた。

古代のキリスト教以前の文化――そこからヨーロッパ文明が進歩した第二の構成要素――は西欧には15世紀半ばまでほとんどただその特異な外形で知られていて、そのような状態からかの文化は異教的な古代ローマの生活に入っていった。しかし別の側面、ギリシアとアジア文化は純粋な形としてはまさにほぼコンスタンチノープルの征服まではヨーロッパに広まらなかった。その間、知られているように、ローマがあらゆる異教文明の代表者というには遠かった。ただ世界の物質的支配があるだけで、その間のローマの上の精神的支配を保有していたのはギリシア語でありギリシアの教養であった。従って、六千年間の努力の継続で手に入れた人間知性のすべての経験と財産をたんにそのローマ文化の中に受け入れてきた形式において受容することは、つまり全く一面的な形式で受容し、必然的にこの一面性とその固有の文化の性格を伝える危険にさらされることを意味した。実際にヨーロッパではそのようなことが起こった。15世紀にギリシアの追放者たちが貴重な古文書を携えて西欧にやって来たときにはもう遅かった。ヨーロッパの文化は確かに盛んになった。しかしその価値は同じままであり、考え方や生活の方式はすでに基本が固まっていた。ギリシアの学問は知識と関心の範囲を広げ、思想を覚醒させ、知性を飛躍させ発展させたが、魂の支配的傾向はもう変えられなかった。

最後に三番目の文明の構成要素は社会教育であり西欧における特殊性を示している。すなわちヨーロッパの国民のどれ一つにあっても国家が国民生活と国民の自覚の平穏な発展から生まれてはいない。平穏な発展では日常の関係の中に具現している人々の支配的な宗教観念と社会観念が、自然に育まれ強固になり、まさしく社会組織の整然とした統一が反映されているある共通の同一思想に結びつけられる。反対にヨーロッパの社会生活は何らかの普通ではない歴史的に予期しない事態によりほとんどどこでも暴力的に起こった。二つの敵対的民族の死をかけた戦いから、征服者の圧迫から、被征服者の抵抗から、そして最後に上辺では力の不均衡による征服の争いが終わりになる思いがけない協定からである。

（未完）